亀とカマキリと――Nが語る

辿れるかぎり私の最も古い記憶のひとつで、五歳になる少し前の出来事だ。

杉並区荻窪（旧名・西田町）の生家、西側の道路を挟んで荻外荘（近衛文麿邸）があった。借家だったが、敷地は二百坪、家は平屋で六部屋あり、一年半ほど函館で暮らした時期を挟み、七歳まで住んだ。私の人生でこれほど広い場所で生活したことは他にない。八歳以降、共同トイレに共同炊事場、風呂なし、六畳一間の生活が長く続くことになる。

正月を過ぎたころのこと、それは笑いの広がる最後の家族団欒だった。夕食がすんで、父は皆を居間に集め、鞄から小さな袋を取り出し、畳に置いた。中から出てきたのは、ブリキ製のゼンマイ仕掛けの亀のおもちゃだった。父と母、祖母、四歳九カ月の私、九歳上の姉、二歳半の弟が、車座

になっていた。

もちろん子どもの私は知る由もないが、我が家はそのとき貧窮のどん底にあった。戦前、同盟通信（共同通信と時事通信の前身）の政治記者として働いていた父は、刊行した三冊の本で戦犯となり、弁明書を出して最終的に追放処分を免れたものの、責任を取って会社には残らず、友人たちとタブロイド版の新たな新聞を発行した。名取洋之助を中心とするフォトジャーナリズムの立ち上げで発想はよかったが、経営難が続き破綻。ちょうどその整理に当たっていた時期だ。

運が悪いことに、肺結核の病勢も進んでいた。二カ月後、函館の叔父（父の弟）を頼って、家族は荻窪を引き払うことになる。旅費を作るために蔵書はもとより、布団まで売ったらしい。後年、姉が母から聞いたところでは、藤娘の博多人形が意外なほど高く売却できたという。そういう時代だったのだ。

翌年の五月、父は四十二歳で亡くなった。九月、母は生き延びる方策として姉と弟を親戚に預け、とりあえず私だけを連れて荻窪に戻り、職探しに奔走した。かつての賑わいに欠けた薄闇に沈む空虚な家で母の帰りを待っていると、幼いながらも私の心理的な動揺は大きかった。

父の部屋に入ると、『ライフ』誌が積んであり、乗り物の写真を見つけては飽かずに眺めていた。洋雑誌は機械油に似たインクの匂いがあり、なぜか私はそれが好きだった。五年前、上野の不忍池畔の骨董市で当時の『ライフ』誌を見つけたのだが、なつかしいその匂いが残っていて、いわば私

は記憶の奥の残り香を購入したようなものだった。

あの日、父はブリキの亀のおもちゃをどこで手に入れたのか。茶色の甲羅の埃をどてらの袖口で軽く拭き、もったいぶった仕草でゼンマイを巻く。ブリキ製の亀が、リズミカルな軋みをともないながら手足を動かす。亀は車座の中央に向かって、人々の眼差しの集中に途惑うように、ゆっくりと畳を進み始める。

家族の笑いが広がる。このとき私はとっさに何を考えたのか。

ここで大げさに亀の動きを恐がるふりをすれば、もっと賑わいが増し、場に活気が出るに違いないと思ったのだ。私は「こわい、こわーい」と叫び、父親にしがみついた。期待していたとおり、笑いが大きくなった。

ところが意想外の事態が生じた。弟がオムツで膨らんだ尻を振りながら亀に近づき、何の迷いを見せずに摑み取り、誇らしげに持ち上げた。亀はブリキ製ではなく、捕獲された小動物として空しく宙でもがいているように見えた。

歓声とともに拍手が起こった。弟びいきだった祖母が、「この子は強い、強い。お兄ちゃんに勝ったね」と言うと、さらに笑いが大きくなった。

こんなもの恐いとはまったく思っていないのに、もはや破綻した演技の修復はできない。私は恥ずかしさを覚えながら、茫然と事態をやり過ごすしかなかった。私の自作自演の芝居、即興のフィ

クションの企みは失敗に終わったのだ。
姉もこの場面を記憶していた。二人とも中年に到って、荻窪の家の記憶を寄せ合う話の中で出てきたものだ。
――私もその場面、よく覚えているわ。三つ子の魂、何とかじゃないけど、あなたらしい話ね。でも、勘違いがあるんじゃない。私はすぐにわかったよ。受けねらいで、わざと恐がっているふりをしているって。だって、何となく覚えているんだけど、仕草がオーバーで、自慢そうに恐がっていたじゃない。もしかしたら、みんなわかった上で笑っていたかもしれない。
――そこまで覚えているの？　それなら、みんなで芝居に付き合ってくれたというわけだ。結果的に家族そろって嘘に同調したということか。
――そういうややこしいこと、私には判らないから、自分で考えてちょうだい。
いくつかの思いが明滅する。
誰かが虚構を演じたとき、拵え事と感知しつつもとっさの気遣いから、その虚構を守ってやろうとおのずと協働することがあるように思う。わざとらしい言動は、わざとらしい他者の共演を得て命脈を保つのだ。作り事が作り事として成り立つためには、フィクションに加担する誰かとの共犯関係のステージが必要となる。
ブリキの亀をめぐる私の受けねらいの虚構的な振る舞いは、もちろん一つの幼い経験的事例でし

かないのであるが。

荻窪の家で遭遇したもう一つ重要な出来事がある。

北海道から帰った後、広い庭を独り占めして遊んでいた。玄関先に大きな金木犀（きんもくせい）、柿が裏庭に二本、表に三本あり、椿、桜、栗、モミジ、ヤツデ、クヌギ、隣家の屋敷林との境には欅（けやき）の大木もあった。庭の木々の名前と位置は、かなり細かく覚えているつもりだったが、母と姉にたずね、記憶を補ってきた。

庭では朝早くから鳥たちが鳴きかわし、青大将や狸、野鼠がときどき出没し、あまり手入れの行き届いていない雑草だらけの花壇には、蜂やトンボ、蝶などが集まった。理由はわからないが、草色、褐色を含めカマキリがとりわけ多く、鎌形の前肢（まえあし）を持ち上げ、頭を回して大きな両目でにらむ、あの威嚇の姿勢が、ことのほか私のお気に入りだった。

この庭で謎の光景を何度か目撃した。樹皮の粗さの記憶から推測して、たぶんクヌギだったと思うのだが、幹が二又に分かれているところに、小さな枝の突起があった。そこへ黒蟻が上ってくると、細枝がすばやく伸びて、たちまち蟻の姿が消えた。

瞬時のことで、何が起こったか判らない。不思議な木があるものだと思いながらその場を離れ、しばらくして戻るとおかしな動きを見せた枝は消えていた。夢見のような出来事だった。

別の日のこと、たぶん私は蝶を追っていたのだと思う。あれは何という花であったか、私は花の名など関心外だったが、美しい桜色の花びらにガクの白い蕾(つぼみ)が開きかかっていた。その花に蜆蝶(しじみちょう)がとまった瞬間、花びらの一枚から針のようなものが出て、青い翅(はね)が引き寄せられ、折りたたまれるように見えた。

何が起こったか、この場合も判らない。またもや魔法が出現したのだ。この庭は秘密の力を持つ木や花ばかりあるなー、と私は子どもなりのまっすぐな思いこみと理解で日々を送り、決して口外してはならない内緒事として心の奥にしまっていた。おそらく木と花の秘めた体験を細部までよく記憶しているのは、このように他人へ告げてはいけない隠し事として留め置いたからに違いない。

この魔法の正体が明らかになったのは、いつのことか定かではない。私が目撃した出来事はカマキリの擬態(ミミクリー)であった、といつしか知るにいたった。少なからず拍子抜けしたことは確かだが、むしろ自然現象のセンス・オブ・ワンダーに、なおいっそう心奪われたような気がする。

昆虫の擬態は驚くほど多様で、葉の葉脈や枯れた部分までそっくりに似せてみたり、鳥の餌食にならないように糞に化けたり、猛禽類(もうきんるい)の目玉そっくりに全身を変容させて天敵を威嚇するものたちもいる。

私たち人間は擬態という現象を認識しているのでその行動を理解できるが、そうでなければまさしく惑乱と迷妄につままれる怪事であろう。小動物の単なる生き残り戦略に過ぎないが、あえて擬

人化した言い方をすれば、私はカマキリに見事に騙されていたわけだ。カマキリはいるのに、いないと見せかけていた。それは生存のための巧緻（こうち）な変身マジックだった。迷彩の巧み、偽装の妙手こそ、存在と不在のドラマであり、荻窪の家の庭はその魔法の舞台だったことになる。